例えば、体内からすべて排除すべきとしていた微生物が
私たちのいのちと健康を支えていることに気づいたとき、
また、大地に根を張る植物が、見知らぬ菌と糸を結び
互いの不足を補いながら生きていることに気づいたとき、

異なる他者の存在を恐れず肯定し
積極的に自己の一部と見做して協調することは、
自己をより強く、よりしなやかに変えていく力となる。

そして、このような「寛容」な振る舞いによる共存に一歩踏み出したとき、
意見の違いを超えて共に目指す理想が現れ
「問い」を解くための新たな叡智が生まれる。

対話と「寛容」が生み出す創発の力

2025年4月、東京大学は日本武道館で挙行された大学院入学式において、約3,200名の新入生を迎えました。

式辞を通して藤井総長は彼らにまず、身体のメカニズムにおける「自己」とは何かを問いかけ、かつては病原体とみなしていた微生物が実は「自己」を構成する一部として重篤な疾患リスクを防いでいること、他者（微生物）を受け入れる「寛容」な体内メカニズムの発見によって医学の視点が変わったことを紹介しました。さらに、この医学的事例から導き出されることとして、「自己」は一定不変の「存在」ではなく、他者と向き合い、対話を重ねることで発展し、変容しながら形成されるダイナミクスそのものであることを説明しました。また、対話を通して様々な意見の違いをその背景にまでさかのぼって理解し、ともに目指す理想がどこにあるかを探る努力こそが、地球規模課題の解決に必要だと伝えました。

そして、ここから始まる大学院生活で、初めて出会うひとやものとの対話の過程が独自の「創発システム」として新しい「自己」を生み出し、驚き、面白く、楽しく思えるような未来を拓いていくだろうと激励しました。

2025年度東京大学大学院入学式 総長式辞はこちらからご覧いただけます
https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message2025_05.html